

◎次の文章をよく読んで、解答用紙の問いに答えなさい。

桜が満開の週末、近所¹の公園に行った。見渡す限り芝生^{しばふ}が広がるその公園は、周囲の公園やマンションに住む人々の憩い^いの場だ。

桜の木の下では、人々がお弁当を広げたりバーベキューをしたりと、思い思いに花見を楽しんでいた。小さな子供を連れた若い家族が圧倒的に多い。私が日常生活の中で接触する機会がほとんどない人たちだった。

人の群れから少し離れたところで、髪を二つにむすんだ小さな女の子が泣いていた。大声をあげるわけでもなく、(A)泣いている。涙がたまった二つの瞳^{ひとみ}が、いまにも落っこちそうだった。誰かとケンカして泣いているのだろう、と軽く思っただけで一度通り過ぎ、立ち止まった。彼女と人々の群れの微妙な距離が気になった。

迷子³かもしれない。

実はその時、私はけっこう急いでいた。どうせなら桜が咲く公園を横切って駅へ行こう、と思って立ち寄っただけで、花見をしに来たわけではなかった。誰かがあの女の子の存在に気づけば、少なくとも彼女の安全はかくほされる。とりあえず誰かが気づくのを待とう、と思い、少し離れたところから女の子を見ていた。

ところがひにくな^cことに、誰も女の子の存在に足を止めなかった。おそらく千人は優に超す人が桜を見に来ているのに、なぜ誰も気づかないんだ、と、自分のことは棚^{たな}に上げてあくたいをつきたくなる。子供連れで花見に来ている人たちは、自分の子供の安全かくほに手一杯で、他の子の存在など目に入っていない様子。この地球上にひとりぼっち、という女の子の心細さを、これ以上引きのばすわけにもいかなかった。

「どうしたの?」と声をかけた。

「おとうさん、いなくなっちゃった」

女の子はそういうと、突然(B)しゃくりあげ始めた。大声で泣きたかったのに、いままで必死で我慢していたのだろう。

「泣かないで。すぐにおとうさんみつかるよ。お名前、なんていうの?」

「ともよ」

「いくつ?」

「いさこ」

「お母さんも一緒に来たの?」

「あ、おうち」

「じゃあ、い に電話してみようか。 い の電話番号知ってる?」

「知らない」

「じゃあ、う、一緒に探そうね。 う はどんなお洋服を着ているの?」

「しろとおおのずぼん」

「どんな上着を着てる?」

「……」

白地に青い線が入った、あるいは青地に白い線が入ったジャージといったところだろう。立ち上がって周囲を見回す。花見に来ているお父さんがたは、多かれ少なかれ、みなそんなようなズボンを穿いていた。

「お父さんのお名前は?」

「けんじ」

「よし、じゃあお父さんと呼んでみよう」

私は立ち上がり、「けんじさん」「ともちゃんのおとーさん」と呼んでみた。しかしもともと大声を出すのが苦手な上、こころは花見会場のだ、叫ぶそばから喧嘩にかき消されてしまう。

顔を見たこともない、白と青のズボンを穿いた「けんじさん」を、この人ごみの中から見つけたのはしなんの業だと思った。公園管理所で迷子放送を頼んだほうがよさそうだった。

「じゃあ公園の事務所に行つて、お父さんを探してもらおうね」

ともちゃんは黙つてうなずいた。一人ではなくなったことで気持ちに余裕ができたのか、いつの間にか泣きやみ、私の左手をぎゅっと握りしめていた。

私はともちゃんと手をつなぎながら、桜の舞う人ごみの中をゆっくり歩いた。

ふしぎな気分だった。例年通り、今年もどんちゃん騒ぎの花見をするつもりはなかった。武蔵野は桜が多い。人が寝静まった夜にアパートを出、信号や街灯にぼんやりてらされた桜並木を一人で歩く、それがここ数年の私の花見だった。

そんな自分が、いまは五歳の女の子と手をつなぎながら桜の下を歩いている。私がどんな人間か知らないのに、もしかしたらものすごく悪いことを考えている人間かもしれないのに、ともちゃんは私の左手を固く握って離さない。いまの彼女には、この左手を信じるしか家に帰る方法はないのだった。

こんなに固く人と手をつないだのは何年ぶりだろう。このまま、ずっと歩いていけたらいいのに。ともちゃんの右手が、私の何かを溶かした。

園内放送記入用紙に必要事項を書き、迷子放送を申し込んだ。管理所のおじさんはこういう状況に慣れているらしく、とても親切だった。「心配ないよ。お父さん、これを聞いたらすぐに迎えに来るからね」といってともちゃんの頭を撫で、私たち二人を奥のテーブルに招き入れてくれた。

反応は、拍子抜けするほどすぐにあった。プラスチックのひこうきを持った小学校低学年ぐらいの男の子が「ともよいますか？」とかけこんできた。

「顔がそっくりだ。お兄ちゃんかな？」とおじさんが尋ねる。

「はい」

「お兄ちゃんが来たよ」

意外なことに、私はすっかりしていた。ともちゃんのことが気に入りはじめていた。家族が引き取りに来た以上、私がともちゃんと一緒にいる理由はもはや存在しない。これ以上彼女に固執しようとすれば、あやしい人になってしまう。

ところがともちゃんは席を立とうとしなかった。お兄ちゃんが手を引っぱっても、いやいやをして椅子から動こうとしない。全然納得していない様子だった。しばらく落ち着いていたのに、また(A)泣き始めた。

少しして、白地に青の線が入ったジャージの上下を着た男性が管理所に入ってきた。これが「けんじさん」か。私よりはるかに若いお父さんだった。ともちゃんは立ち上がり、怒った顔で父親にかけ寄った。そして足にしがみつき、猫が自分の匂いをすりつけるように、ズボンに頭を(C)なすりつけた。ズボンで涙を拭いているようだった。

しろとおおのずぼん——ともちゃんはお父さんの上着を覚えていなかった。確かに、彼女の目線の高さからは、お父さんのズボンしか見えないのだった。

けんじさんは管理所のおじさんに「すいませんでした」と一言いい、帰ろうとした。おじさんがそれを制するように、「この人が連れてきてくれたんですよ」と私を指す。

「とにかくよかったです。お父さんがすぐに見つかって」

私はそういった。特に何の意味もこめていない、挨拶ぐらいのつもりだった。ところがけんじさんは、私と管理所のおじさんの言葉に責められているような気がしたらしい。彼はバツの悪そうな顔で私に軽く会釈をしたあと、「だめじゃないか、ちゃんと見てろっていったたる」と息子の頭をこづいた。息子の顔が(D)うちに歪んでいく。抱き上げられたともちゃんは、お父さんの肩に顔を伏せたまま顔を上げない。「ともちゃん、ばいばいね」というと、ともちゃんは顔を上げず、手だけを振り返した。彼女の心の中に、もう私の居場所などなかった。

ともちゃんが無事お父さんと会えたのだから、めでたしめでたしなのだが、私は思いのほか落ちこんでいた。お礼をいってもらいたかったのではない。ただ、一瞬でも地上に「え」になってしまったともちゃんに対し、何か他にいうべきことはないのかという気持ちだった。

妻に二人の子供を託されて公園にやって来たお父さん。娘の姿が見えなくなった時、とっさに彼の頭に浮かんだのは自己保身だった。確かに息子はちよっぴり不注意だったかもしれない。でもまだ十にもならないくらいの子に、ともちゃんの監督責任を押しつけるのは少々酷ではないか？ 家に帰り、ともちゃん迷子事件がはつかくした時、妻にはこういうのだろうか。

「だいたい、おまえが俺にこんなことを押しつけるからいけないんだ！」

(E)した気分をまぎらわせるため、私は(F)歩き、すぐにともちゃんの家族を追いつ越した。しばらく歩いたところで振り返ると、ともちゃんの家族は他の無数の家族たちの風景に溶けこみ、すでに見分けがつかなくなっていた。

ともちゃんと二人で歩いていた時、私は確かに桜のある風景の一部だった。しかしいまは、同じ風景から拒絶されているような気がした。

桜吹雪の下、歩くスピードを速め、私は逃げるように公園をあとにした。

(星野博美 『のりたまと煙突』)

注 喧噪 Ⅱ 人声や物音でさわがしいこと。

固執 Ⅱ 自分の態度や意見を強固にして、簡単に変えないこと。

